

芭蕉元禄事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十六年三月度 入選句（投稿総数千三百六十三句・一般投句数五百七十五句）

特選

選者 田中 青志

蛍雪を知らぬ子どもら卒業す

大垣市

木村 一句

仰げば尊し、蛍の光窓の雪、卒業式定番の歌、今は唱われていない。  
そうゆう必要はないと言われればそれまでであるが事の本質が失われていくようで古い世代は少しさびしい思いがある。必ずしもこの思想の教育でなくとも教育は出来るとしても、その心だけは未来に伝えて行ってほしいと思う。

母ありし日はなしなど木の芽和

大垣市

安田 直隆

料理で木の芽と言えば山椒の芽を指す。あの芳しい香りは早春のものそして日本料理の粹たるものであるうか、こんな季節になると必ず食卓に出て来たなと話し合えばそこに登場して来るのは在りし日の母である。

今は何やかや忙しさに取り紛れ縁遠くなりつつあることを嘆きつつもこれが母を思い出す“よすが”ともあればそれも供養というものかも知れない。

ひとひらごと日を抱きをり梅の花

安八郡神戸町

澤崎 和子

春に魁て咲く梅の花、咲きかけて思わぬ寒さに出会い打ち震えることもしばしばである。さればひとひらごと淡き日を精いつばい受けて、命のかぎり咲くことこそが梅の花の定めというものでもあるうか。その健げなる梅の花に声援を送つてあげようではないか。

秀逸

雛飾り手伝ふ余生恙なし

大垣市

伊藤 京子

百才の母に百回春の来し

大垣市

北村 征子

春の雪雨へと変るひと日かな

大垣市

岡田 あや子

水温む藻の間藻の間に魚の翳

大垣市

伊藤 有紀

春一番明日の扉押し開ける

大垣市

白井 静子

梅咲くや父が遺せし句のかおり

大垣市

山田 千歌子

大地踏む嬰の一步に春立ちぬ

大垣市

下村 常子

春さむしルーペで文字をふくらまし

福井県福井市

三ツ山 ひろし

どこからも見ゆる伊吹や梅日和

大垣市

日比野 友子

耕や身丈に合ひし母の歟

不破郡垂井町

中嶋 笑子

入選

朝刊に挟まれてゐる寒さかな	大垣市	鶴田 信子
校庭に人っ子おらず春休み	安八郡神戸町	早津 郁男
鬼瓦の喉まで日差し春隣	安八郡神戸町	澤崎 和子
子らの絵のどれにもお日さま建国日	大垣市	町野 眞佐子
城下町二月の風はよく曲る	東京都世田谷区	関戸 信治
耕運機に油注す夫犬ふぐり	不破郡垂井町	服部 智恵
川音の高き山道木の芽晴	愛知県瀬戸市	田村 清美
晩年のだまされやすく万愚節	大垣市	中山 あや子
不器用に生きてほろ苦露の薑	大垣市	棚橋 みさを
腕白は陰をひそめて卒業す	大垣市	傍島 豊子

入選

ひとつずつ光あつめて猫柳	福井県福井市	三ツ山 ひろし
反り返り弾みをつけて鳩潜る	大垣市	川瀬 貞枝
外に出ればもう溶けてゐる春の雪	大垣市	早崎 美弥子
雛の灯のともりてよりの里ごころ	大垣市	川瀬 幸子
初渡航こぼれる笑みの弥生かな	不破郡垂井町	久保田 紘義
おぼろ月ちちが唄ひし八十の詩	大垣市	鈴木 美江子
初雲雀午後の紅茶の欲しき頃	大垣市	神野 武彦
触るる手に戻る遠き日猫柳	安八郡神戸町	高橋 泰
ふらここを高くこぐ児の美濃なまり	大垣市	和田 勝子
母と子の呼び合ふ土手や土筆つみ	大垣市	高木 治子
鼻の穴こじあけてくる寒さかな	石川県野々市市	山西 真理子

選者吟

水落ちる音に力や柳の芽

田中 青志